

「まちづくり」の展開と その可能性

—東京都足立区を事例として—

山見かおり

「まちづくり」とは何かを説明することは難しい。それは、まちづくりが単に地域の環境整備にとどまらず、多方面で用いられているからである。しかし、都市計画と比較すると、よりソフトな面を追求していること、地域住民がその主役である、という特徴が浮かび上がってくる。地域での活動のため、地域に密着した組織である自治会などの既成住民組織がその担い手としてまず考えられるが、最近ではまちづくりに関心のある人が集まったボランティアな集団によるまちづくりも行われている。

まちづくりは、住民だけで行うことはできず、行政の力が必要である。その両者の関係は時代とともに変遷していく。近代はタテの関係の時代であった。これは封建社会の流れを汲むものである。しかし、高度経済成長に伴う環境悪化が深刻になると、従来の陳情ルートだけではそれらを解決することができなくなった。そこで住民が自ら立ち上がり、住民運動を起こし、対立の時代を迎えた。行政は従来の政策の見直しを迫られ、より住民参加を視点にいれたコミュニティ行政へと変化した。一方の住民側は地域において主体性を持つようになり、行政に対して協力するようになる。こうして現在の歩み寄りの時代となり、住民が主体で行政がその補助的役割を担うという新たな地域活動として、まちづくりが登場することになる。

足立区は宿場町千住と、その他の地域に分類されるが、概して保守的な地域である。それは、東京の主要工業地域であったため、都市公害が深刻であったにもかかわらず、住民運動が発生しなかったことからわかる。そのなかで、足立区は積極的にまちづくり政策を展開する。特に、住民主体のまちづくりを資金面から援助する「あだちまちづくりトラ

スト」制度を、全国の自治体として初めて制度化したことは注目される。

この制度を利用したまちづくり団体である「千住・町・元気・探検隊」を調査した。探検隊はまちづくりに興味のある人々によって構成されたボランティアな集団で、地域外の人々も参加している。探検隊は町雑誌『千住』の制作活動をしており、その目的は、千住のよさを見直すことである。新住民の立場からその地域のよさを地付きの人々に知ってもらおうという視点が、今までにないもので興味深い。

現在のところ、足立区はまちづくり活動の主体として既成住民組織に重点を置き、住民にまちづくりを呼びかけている段階である。また、千住で探検隊の活動はまだごく一部のものにすぎない。よって、探検隊の活動が行政や地付きの人々に高く評価はされていない。しかし、探検隊は住民主体のまちづくり活動として注目すべき存在であり、これからの活動によっては、足立区のまちづくりの先駆的存在となり得るだろう。

GISを用いた東京 23 区内の 避難場所に関する分析

吉岡由希子

1995年に発生した兵庫県南部地震は多くの都市施設を破壊し、生活環境に大きな影響を及ぼしてさまざまな社会的課題を惹起した。本研究ではその中の避難場所問題に焦点を絞った。

本研究の目的は、現在都で指定されている避難場所、避難地区割り当ては適切であるかどうかを分析することであり、GISを用いて行った。近いうちに必ず大地震が起きるといわれている東京都、特に被害が大きいと予想される23区を対象とした。

まず、都の指定した避難場所、避難地区割り当て、避難道路をGISの地図上に入力し、さらに直線距離だけを考慮した仮想避難区域を作成した。また別に、老人、子供を考慮し